



特選

春節

西今町

花井守人

新たな季節の息吹き
ふつふつ
息吹きゆく心

あの光の麓まで

前へ

(評) 一年は一月から始まる。日本の四季は春から数える。冷たく短かい陽差しの日々を耐えて人は春を待つ。「春節」つらく悲しい出来事を経た心も又、ふつふつとたぎり始めるだろう。美しい涙の結晶のような簡潔な表現の冴えである。

特選

回り灯籠

東近江市

辰巳友佳子

簀戸に替えられた
ねんねのおばあちゃんの隠居の部屋に
尻尾の切れたブチネコが居すわった
数日後

十数年寝たきりのおばあちゃんは
暑い夏の日ぼつくりと死んだ
その年の夏は村中ばたばたと死んで
墓の掘り手が足らず
ねんねのおばあちゃんはドライアイス漬けと
なった

祭壇の蝋燭がいつの間にか消えていた
回り灯籠の水色桃色のハスがクルクルキラキラ
ブチネコは鼻を近づけたり

前足でこついたりして
それは不規則な速さで回り出した
ドライアイスが溶け出し白く漂う中で
ねんねのおばあちゃんの足がコトリと動き
スルメのような臭いを発した爪に
ブチネコは飛びついた
コリコリと食む音と
回り灯籠のクルクルキラキラ

庭に青い風が通った四日目
村の男は白装束で
額に白い三角の布をつけ
ねんねのおばあちゃんを埋めた

夏が来てまた簀戸に替え
盆が来る
回り灯籠は
足指を返せとまわり続ける

(評) 人が手で穴を掘って死者を埋める土葬の時代の掘り手が足りなくなるほど死者が出る夏の猛暑とあれば、猫が死者の足指を食むという事態も自然なことだったか。過ぎた夏の異様な一コマが回り灯籠によく象徴されている。

笑いに变えて

西今町

谷口明美

嫁たちの土打つ音が

聞こえだす頃

使い込んだ褐色の麻筒を脇に

苧績みが始まる

おぼつかない下駄掛けで

ひと手間の野菜料理を下げて

寺の本堂に集まる

おうめさん おそでさん

おえつさんなどと呼び合う老婆

手馴れた捌きで青麻を裂き

指先で丹念に結わえながら

戦死した夫や息子の無念

孫や嫁の自慢と愚痴

止まらぬ口と手先で

涙も鼻水も終いには泣き笑いに变えて

円い糸の輪とともに

麻筒に繰り落とし続け

ふんわりと積み上がった

わずかばかりの績み麻が

行商男の背負い風呂敷に包まれると

前垂れの麻くずを払いながら

老婆たちは

なぜか 安堵の表情で帰路に着くのだ

がらん堂の片隅に

麻筒と小さな温もりを置いて

(評)

「苧績み」という手作業の有り様を作者はそれを知らない者の前に確かに描き出す。粗末な着物に前垂れ下駄ばきの老婆たちが、労苦の染みたごつい指で麻糸をつむぎながら働き蟻の苦勞の日々を言葉に吐きだしあつてひととき安らぐ。小さな温もりを置いての最終行 作者は名もない存在へ愛をこめて寄り添っている。



入選

ジャンクフード

正法寺町

高井

豊

背負ってきたものを下ろして
噛みしめている

小柄な老婦人がひとり
巻き寿司をひとつ
いま割り箸で切り分けているところ

太ったジャンパーの老人は
両手で大きなハンバーガーにかぶりついでい
る

平日のこの時間帯には
年寄りがショッピングモールの広場に集まっ
てくる

冷たい弁当には慣れた
孤食にも耐えてきたのだが

こども連れの家族の傍らで
交わすことのない視線は
遠い日の行方を追っている

コーヒートフライドポテトを手にしたものの
ぼくは 立っている
相席あいまきを許さない気配なのだ

注：「Junk food」

ポテトチップスやハンバーガーの
ような高カロリー、低栄養価の食
品をいう。

(評) 人は生きてきたように死ぬ 生き
てきたように老いるとぼくは来し方
を噛みしめているのだろう。競争を
強いる社会で老いれば他者へのやわ
らかでみずみずしい想像力の枯渇に
痛く身を刺されるばかりだ。

入選

冬木立のむこう

西今町

やまかみ まさよ

肩をたたかれた気がして ふりむけば
冬の身なりのまま
たたずんでいるのは だれか

しろくゆるやかに たちのぼる
野焼きのけむりにまぎれ
風もなく にわな一日ははじまり

竹林と雑木林のすきまを気だるく

陽は ぬって入り
それぞれの梢にふりかかり
芽ぶく仕度へさそいかける頃

空いちめん

はりめぐらされた か細い枝々の
ところどころの宿り木にからまりながら
不意にふく風のとりこになって
空になげ出されてしまった私 と
いっしょに連れだつてゆこう

もう

寒くはない

さみしく ない

ひこうき雲が幾すじも交差し
あるいは平行している空の間
おもいのたけも何もかも すこしずつ
春にむかおうとしているのに
あたりには不似合いな
ひとごとのようなふりして。

注：「にわ」穏やかな天候のことをいう。

(評) 私たちは孤独ではない。「あな
た」と二人称で呼ぶもう一人の自分
と生きている。"にわ"な一日が来
ると空を見上げさみしくはなくな
る。そんな思いをこの作品は伝え
る。ただ最終連の四行を評者は解し
かねている。

入選

星降る夕べ

馬場二丁目

清水はる

誰かを妬み
誰かを怒らせ

少し役に立ち
少し疎まれ

わたしは生きている

四世代一つ家根に
肩寄せ 離れ
笑って 泣いて

生きている

九十三歳

足腰達者

まだ まだ 生きる

生きねばならぬ
覚悟は よいか

星降る夕べ

手鏡引き寄せ

につ と笑った

(評)

“一つ家根とは見事な造語である。家族は家から生えてくる者というし、たたかな信念を持つ四世代同居の長だからこそ、星降る夕べ作者は手鏡に九十三歳の己れを映し、につと笑うのだ。生きぬくことへの強烈な覚悟を前にしては、ただひれ伏すのみ。”

入選

彩花風韻

稲里町

川村利男

久しぶりに私は痛い程の花の彩を見た

“この春は何時もの春と変らねど

何か気になる国の未来が”

移ろいの足音が

急加速する四月の初頭は

農家にとっては、もう初場所の中目

たんくくと歩み続ける長丁場に

愛想尽かした人が増え

全てが限界集落の姿だ

せめて少しでも

時代感に後れじと、気を取り直し

仕切に入るが

粘り腰も及ばぬ老体は

手も足も出ない

米離れ、重労働、米価下落、高齢化：

未来が見えぬ息の根仕事

「だが、こゝに」

肝心要の命を育てる土が

終生負け続けても挑戦出来る

広い土俵がこゝにある

四季の風に包まれた

千草に宿る朝露の輝き

琵琶の湖面に映える夕茜の空

どれ一つ取っても捨る事の出来ない

無限の恵宝だ

草木も虫達も大声援を送ってくれる

そして私は今年も

百億の命との出合の爲に

神を祀り

土俵の砂を掃き清める。

(評)

農業を土俵入りにたとえながら作者は土に生きる生き方の“無限の恵宝”を歌い上げる。真に豊かな生への肯定を凛と涼やかに読む者に伝えて。

佳作

春愁

池州町

戸田雅子

佳作

やすらぎのおしやべり

東近江市

田中和子

佳作

サンキユー サンキユー

芹橋二丁目

伊藤正子

《総評》

お作品群に向きあわせていただくのは今回で二度目です。まずの読後感は清々しいさわやかさでした。日々の暮らしの中で強く心に焼きついた光景 生きゆく自身の思いや願い等を素直に文字にしていらつしやる。飾ることなく野心から遠い率直さがどのお作品にもあり。それが読後の好印象につながります。

とても恵まれた日本の現状です。生命を養うための労働にのみしぼられるのでなく庶民が本を読み歌をつくり詩を書いたりできるのです。この有難さの中 私のような者が物を書く時 ただ自分という読者にむけて書けばいいのだと私は考えています。自分が書いて自分が読む。そして自分の書いたものにほんの少し感動する。それでいい。

お作品の作者の方々は皆御自身のお作品に感動なさったはずで。順列や優劣をつけるなど本来意味のないことです。最良の読者は作者です。皆様に心からエールを送ります。

山本英子

選者詩

巡礼 — 痕跡 —

石内秀典

父は無言のまま川に飛び込み
鍬で

激しく水を叩いた

鍬の一撃が

魚の頭を砕き

浮き上がった

父は素手で二尺ほどの鯉を抱えあげ

再びはねる鯉を

土手へ投げた

大雨のあと

いつも

田の見回りに父と

得意げに出かけた私

その日は

大川に泥水があふれていた

貧しい食卓へは

決して上らない鯉

その時の

父の一瞬の敏捷な動きを

私は呆然と見ていた

帰国して初めてみた
父の鋭い眼

いつもうづくまる

父の背中しか知らなかった

私は

終生語らなかつた

父の戦争の日々を見た

と

思った



ひつじのいる部屋

尾崎 与里子

昼寝のソファでうとうとしている間に
部屋に

ひつじの心配がするようになった

裏庭で収穫してきたオクラとミョウガを

甘酢でいため

霜のついたグラスにビールをそそいで

乾杯する

どんな言葉も

やさしく食べつくしてしまうひつじに

わたしは安心して

生きていくのに付きまといて離れない

不安のことを少し話す

ここにいない人のことで

とても気がかりでならないことも

ポツリポツリ話す

長い夏の午後

指で圧すと

ひつじの脇腹はむつとあたたかい

汗ばみながら

人知れずひつじを飼っているわたしの部屋

旗

山本英子

わたしがさみしい時

わたしの中で千本の旗がひるがえる

わたしは点であるから

だれもそれを見ない

風は音がない

旗は極小の荒野に立つ

千本の無音がひるがえる

あなたがさみしい時

あなたの中で千本の旗がひるがえる

無数の小さな荒野で

無数の千本がひるがえる

わたしたちはみな点であるから

無数の無音の千本は

指一本で消される